

極早生温州の樹勢強化による高品質安定生産技術に関する研究

第 1 報 高接ぎ方法の改善による早期樹勢回復

草野成夫・大庭義材・津田勝男・下大迫三徳 (福岡県農業総合試験場)

Nario KUSANO, Yoshiki OBA, Katsuo TSUDA and Mitsunori SHIMOOSAKO : Yield Stabilization and Quality Improvement of Extremely Early Satsuma Mandarin by Strengthening Tree Vigor.

1. Recovery of Tree Vigor by Improving the Method of Top-Grafting

全国的に増加傾向にある極早生温州は、極めて結実性がよい反面、極端に樹勢が衰弱し、樹容積の拡大不足、生産の不安定などが指摘されている。本報では、極早生温州の高接ぎ樹における早期の樹勢回復をねらいとした接ぎ木法並びに新梢管理法について検討したので、その結果を報告する。

1. 試験方法

カラタチ台宮川早生温州7年生を中間台とし、山川早生を穂木品種として1986年4月中旬に腹接ぎと側枝切り接ぎによる高接ぎを行った。腹接ぎは主枝、亜主枝上に約20cm間隔で接ぎ木し、主枝、亜主枝の先端に力枝を残した。側枝切り接ぎは、主枝、亜主枝上の横向き側枝を10cm程度で切り返し、20~30cm間隔で接ぎ木した。接ぎ木後発生する中間台の新梢は腹接ぎではすべて除去し、側枝切り接ぎでは特に強く伸長する新梢は1~2葉の除芽で切り返し、その他の弱い枝はそのまま残した。また、切り返し時期は、6月中旬の新梢伸長期(前期切り返し)と7月下旬の夏枝発生直前(後期切り返し)に基部葉7~8枚を残して実施した。

2. 結果及び考察

1) 側枝切り接ぎ区では、1樹当たりの接ぎ口数は腹接ぎに比較して少なかったが、1穂当たりの新梢は春枝

で2.5本、夏枝で12.3本となり腹接ぎよりそれぞれ2、3倍多くなった。また、新梢の確保により1樹当たりの新梢の葉数は腹接ぎに比較して1.7倍、中間台も含めると2.5倍の葉数が確保され、着葉密度の高い樹冠が復元された(第1表)。

夏枝から発生した秋枝は充実が悪く、冬季の寒害で枯れたり落葉したものが多かった。

2) 早期切り返し区では、夏枝の発生は早かったが、発生数は少なく、充実の悪い秋枝の発生を招いた。一方、後期切り返し区では1春枝当たりの夏枝発生数は、早期切り返し区の約1.5倍の7.4本と多くなり、充実の悪い秋枝はほとんど発生しなかった(第2表)。

3) 側枝切り接ぎにおける中間台切口部の大きさと、穂木から発生した春枝の伸長量とは高い正の相関が認められ、切口部の径が大きいほど春枝の伸長は良かった(第1図)。また、接ぎ木位置の高さと春枝の伸長との相関はやや低かったが、高い位置ほど伸長量は大きい傾向であった(第2図)。

以上の結果、樹勢の弱い極早生温州の高接ぎ方法として、側枝切り接ぎと後期切り返しを組合せることにより、早期に新梢数並びに葉数を確保し、樹勢の回復と樹冠の復元を図ることが出来ると考えられる。

第 1 表 接木方法と新梢発生数・葉数

(1987.2)

区	接ぎ口数	新梢発生数			1 春枝当たり 夏枝発生数	新梢の葉数				中間台 葉数	1 樹当たり 総葉数
		春枝	夏枝	秋枝		春枝	夏枝	秋枝	計		
側枝接ぎ	19.8	50.3	243.8	4.3	4.9	247	2,713	25.2	2,985	1,275	4,260
腹接ぎ	31.7	35.7	124.7	14.0	3.2	235	1,340	153.3	1,729	0	1,729

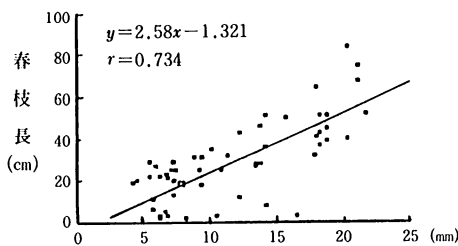
注) 1区1樹4反復 N施肥量20kg/10a

第 2 表 新梢切り返し時期と新梢発生数・葉数

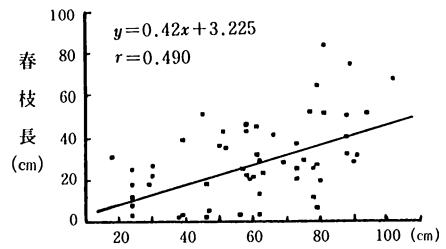
(1987.2)

区	接ぎ口数	新梢発生数			1 春枝当たり 夏枝発生数	新梢の葉数				中間台 葉数	1 樹当たり 総葉数
		春枝	夏枝	秋枝		春枝	夏枝	秋枝	計		
早期切り返し	17.3	30.3	144.7	17.7	4.8	201	1,777	197	2,175	953	3,127
後期切り返し	15.0	39.0	279.3	0.3	7.4	314	2,981	2	3,297	1,242	4,539

注) 1区1樹4反復 側枝接ぎ N施肥量40kg/10a



第 1 図 台木部径と春枝長



第 2 図 接木位置と春枝長